

News Letter

No.5 2011.6

シンポジウム「〈日本〉都市の制度と社会・文化」の企画趣旨について

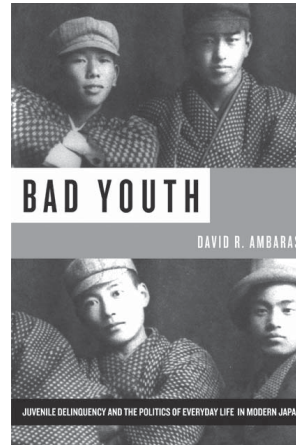
大日方純夫

文学と歴史学との横断的な研究によって、「制度」と「都市」に関わる近代以降の日本文化の特質を明らかにし、近代化のとらえかえしをはかることは、現代・制度・都市プロジェクトの基本的な主眼である。そこで、本年度は、これに鋭角的に迫るための方法として、従来の研究ではほとんど意識的に取り上げられてこなかった不可視の領域に着目することによって、新たな問題を提起することにする。それは、光の当たりにくい分野の存在を示すという本プロジェクトの主眼に合致するものである。具体的には、本年11月、「〈日本〉都市の制度と社会・文化」(仮)と題するシンポジウムを開催して、犯罪・ヤクザ・不良少年(少女)・アウトロー・都市暴動といった、いわば都市の陰画の部分から日本近代のありかたに光をあててみることにしたい。それは、当該の問題視点による日本で最初のシンポジウムとなる。

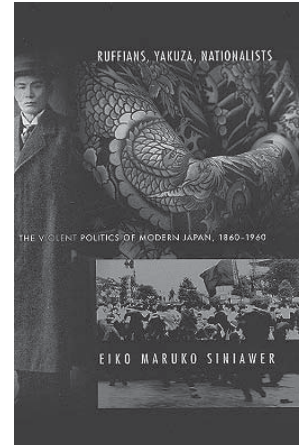
日本においては、19世紀後半から20世紀前半の時期、近代都市が出現・展開していった。産業化にともなって、農村から都市へと人口が移動し、都市に人口が集中・集積していった。こうしたなかで、都市ではその秩序を維持するための規律・規範が創出され、新たな法規と規制方法が展開していった。このような法的規制・統制は、一方で、規制・規範への包摂・馴致を促すとともに、他方で、統制からの逸脱や規制に対する反逆を生み出し、また、規範への背反を生じさせた。このような都市の規範は、国家のあり方と密接なかわりをもつものであり、また、他面で、都市が近代を象徴するがゆえに、近代化のあり方とも密接にかかわり合っていた。

都市への人口集中は、犯罪・非行の増大、不良少年の増加傾向をもたらした。それは、新たな盛り場の出現や、文学・映画などのメディア状況とも密接に関連した。盗売集団、スリ集団、密輸組織、暴力組織などの犯罪集団は、さまざまな犯罪活動を通じて経済的利益の獲得をめざすが、それらの大部分は都市において獲得される。非行とは青少年による逸脱行為であり、それは社会を映す鏡である。非行化を誘発する要因は、いずれも都市の病理に根ざしており、非行発生のメカニズムには、社会文化的な要因が反映される。いかなる社会も、その社会に特有の反社会集団をかかえており、ヤクザ集団は日本社会の代表的な反社会集団である。博徒・テキヤ・愚連隊などには、都市的な性格が刻印されている。さらに、賭博行為自体はいずれの時代でも、一般的には禁止されていたから、博徒集団は反社会的な性格が濃厚な集団である。したがって、このような社会集団のあり方を検証してみることは、「制度」と「都市」のかかわりを解明するための格好の素材であるといえる。それは、海外において、都市の代表的な反社会集団としてのギャングに関して実証的な研究が重ねられていることを想起すれば十分であろう。

一方、20世紀初頭の時期、日本では都市暴動が頻発した。その



Bad Youth
Juvenile Delinquency and the Politics
of Everyday Life in Modern Japan
David R. Ambaras
University of California Press, 2005



Ruffians, Yakuza, Nationalists:
The Violent Politics of Modern
Japan, 1860-1960
Siniawer, Eiko Maruko
Cornell University Press, 2008

背後には何があったのか。都市暴動の中心的な主体であった職工・職人・日雇い労働者などの生活・政治意識の解明を通じて、暴力行使の意味を解読してみる必要がある。土建・テキ屋などの親分子分関係や不良少年などにも注目しながら、都市暴動の構造と意味を解明してみたい。彼らの心情のなかでは、義侠心と義理人情のあつさが重視されていたが、それは、講談・浪曲の復讐物・侠客物の世界に通じるものであった。アウトサイダーと義侠心にあふれる侠客は、彼らのヒーローであった。それは、規律化が強まれば強まるほど、逆の意識や実践が生み出されることを示唆している。

以上のような社会状況は、都市を素材とし都市を記述する都市文学や、都市の犯罪を描きだす探偵小説を出現させていった。他方で、都市化は逆に人々の間に都市への背反と都市からの離脱願望を醸し、アウトロー＝自由人への憧れを生み出していった。都市化が進行した1920年代こそ、股旅ものの主人公であるやくざが、小説・映画などを通じて社会の底辺に生きる人々＝大衆の共感を呼び、大衆文学を生み出していった時期にあたる。制度化された秩序への反逆、権力への怒りといった要素をそこに読みとることは容易である。

近年、海外の研究者のなかでも、不良少年やヤクザなどに着目して、日本の文化、日本の近代を解明しようとする成果が生み出されている。こうした研究者を迎えてシンポジウムを開催し、日本の「都市」と「制度」に関する新しい知見を得るとともに、「世界と共創する新しい日本文化研究」の促進をはかることにしたい。また、それは都市社会史研究と大衆文学研究との、創造的な協同の場となるに違いない。

(現代・制度・都市プロジェクト分担者)

「東アジアの漢籍遺産—奈良を中心として—」国際シンポジウムの企画について

河野貴美子

来る2011年7月28日から31日にかけて、中国・杭州において、浙江工商大学東亜文化研究院・早稲田大学日本古典籍研究所共催、早稲田大学国際日本文学・文化研究所協賛による国際シンポジウム「東アジアの漢籍遺産—奈良を中心として—」を開催するべく計画を進めています。

今回の企画は、浙江工商大学東亜文化研究院院長の王勇教授から、長年にわたり緊密な学術交流を続けている早稲田大学日本古典籍研究所に対してシンポジウム開催の相談が持ちかけられたことに端を発するものです。そして、国際日本文学・文化研究所のアジア・プロジェクト分担者である高松寿夫教授と河野がシンポジウムの企画運営に携わることとなり、また、シンポジウムのテーマである漢籍研究が本アジア・プロジェクトの研究活動の重要な柱でもあることから、国際日本文学・文化研究所も協賛して準備を進めているところです。

浙江工商大学東亜文化研究院は、これまで浙江工商大学に設置されていた日本文化研究所が昇格して2011年2月に発足した研究機構です。院長の王勇教授は、1989年に浙江省初の日本研究機関として杭州大学日本文化研究センターを設立して以来20余年の間、一貫して、東アジアにおける書籍の伝播と影響を中心に、中国における当該分野の研究を牽引してこられました。王勇教授が提唱されている「ブックロード」という概念は、東アジア文化交流の本質を解くキーワードとして、いまや広く認知されるものとなっています。その王勇教授をはじめとして、浙江工商大学には日中関係史や東アジアの歴史文化を専門とする10名余りの研究者が結集しており、当該研究における一大拠点をなしています。

一方の早稲田大学日本古典籍研究所は、主に奈良・平安時代における日本の漢詩文等の文学テキストを対象として、漢籍の受容という面に注目しつつ研究を展開しているプロジェクト研究所です。研究活動においては内外の研究者との学術交流を積極的に行うことを目指し、前身である早稲田大学古代文学比較文学研究所

(2000年12月～2006年3月)の頃から、王勇教授をはじめとする中国・杭州の研究者ともさまざまな共同研究活動を実施してきました。2006年4月にスタートした日本古典籍研究所(所長:高松寿夫教授)は本年3月、満5年の設置期間を終了しましたが、早稲田大学総合研究機構よりさらに5年間の設置延長を認められ、2011年4月より2期目の活動に入りました(所長:河野貴美子)。その第1年目に、このようなシンポジウムを企画できたのはたいへん意義深いことです。

今回のシンポジウムスケジュールは、おおよそ以下のように計画しています。

7月28日:参加者杭州到着
29日:シンポジウム
30日:杭州視察
31日:解散

現在、日本側からは、早稲田大学日本古典籍研究所の研究所員と招聘研究員、また学内外の関連分野の研究者とを合わせて11名が参加し、研究発表を行う予定です。参加者の専門領域は、文学、史学、哲学思想など多岐にわたっています。シンポジウム当日は、中国側参加者との交流を通して、幅広い視点から魅力的な議論が展開されるものと期待されます。

シンポジウムは、両国の研究者が直接に実質的な討論を深められる場にしたいという主催者双方の願いから、分科会形式はとらず、全員が一堂に会する全体会形式で行うことになっています。また、浙江工商大学では同時期に中国国内の日本語教師に対する講習会を開催しているとのことで、中国各地で日本語教育に従事している30名程の研究者とも本シンポジウム会場にて交流できる予定です。

(アジア・プロジェクト分担者)

『早稲田大学文学学術院所蔵 木下尚江資料集』第二集について

中島国彦

早稲田大学文学学術院所蔵「木下尚江資料」のうち、教文館版『木下尚江全集』に未収録の自筆資料を翻刻紹介する活動は、重点領域研究の本プロジェクトのうちでも、いかにも本学ならではの特色のある事業である。その最初の成果が、『木下尚江資料集』第一集「論説草稿」(全96ページ)として本研究所から刊行されたのは、2010年2月のことである。その後、2010年度の事業として、文学学術院創設120周年記念行事の一つである「記念展示 交差する知—文化の想像力」(10・11—28、會津八一記念博物館)での実物展示の実現と、懸案の文学部ホームページ上の「木下尚江資料 画像データベース」の構築と公開(10・11)が達成された。

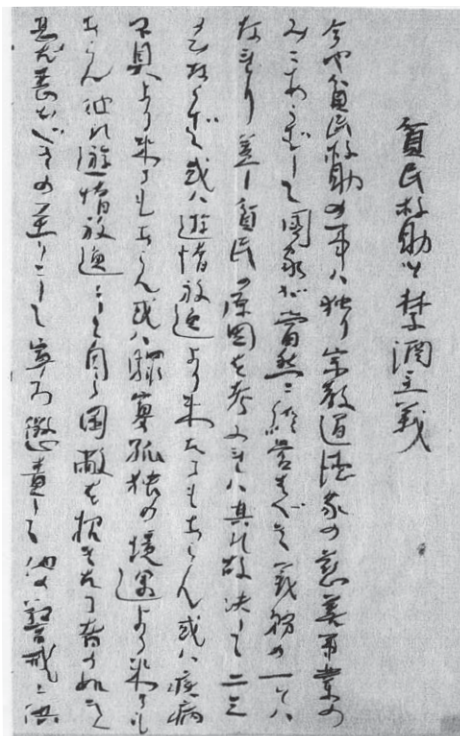
第二集に向けての作業が進み、資料翻刻を担当した大学院博士

課程の宮坂康一・大貫俊彦・解璞・金子亜由美の皆さんの仕事を、2011年4月から本研究所のRAとなった宮坂康一さんがまとめ、わたくしの校閲・解題執筆を経て、このたびこの6月末に刊行の運びとなった。今回の資料の中心は、尚江が得意とした演説のための草稿類であり、第一集に漏れた論説草稿の一部と、これまで部分的に紹介されていた詩歌の草稿が添えられることとなった。そのため、名称を、「論説演説草稿・詩歌草稿」とした。いずれも、全集未収録のものである。中には、かつて40年以上も前に稲垣達郎先生によって一度紹介・翻刻されていたのに、全集から漏れていた、「貧民救助と禁酒主義」のような重要文献の、新しい翻刻本文も含まれている。

その全貌を紹介するために、収録資料の目次を示しておく。題名だけ見ても、尚江の活動の幅の広さがうかがえると思う。〔 〕は、表題が付されていないものに、冒頭を借りて付した仮題である。現在第三集「書簡」に向けての、尚江の手紙の整理・翻刻が進んでいる。これも年度内の刊行を目指して、作業を進めている。いずれも資料集刊行後は、「木下尚江資料 画像データベース」に追加され、画像データが全世界から見られるようになるのである。新たな尚江研究が、期待される。

論説演説草稿

- 以志列の相続及び婚姻法要略
- 風俗問題漸く青年間ニ歓迎せらる
- 日本条約改正の性質目的を論じて朝野の戒慎を求む
- 日本皇位系承古代法論 第一章 遺囑相続法
- 〔本多庸一氏の論説〕
- 貧民救助と禁酒主義
- 青年の難問
- 問題
- 叛逆思想の沿革
- 仏教渡来後の叛逆思想
- 日本国民の宿題
- 生物と政治との関係
- 恐るべき将来の貴族院（革進協会演説）
- 〔日本人ハ果して立憲政治を愛するや〕
- 二十二日夜銀座会館
- 社会問題と武士時代
- 武士時代概論
- 〔組織ノ宏大なるを〕
- 社会主義と普通選挙
- 四月二日夜夫人矯風会演説考案
- 娼妓の時機及方法
- 社会の悪風及び救済
- 鉦毒演説（十一月一日）
- 〔京都に至りて我等は〕
- 哲学館事件と倫理問題
- 自由ト自殺



- 政治上の宗教問題
- 〔今日教会の問題は〕
- 日本の政論と基督教
- 人口論
- 〔若シ立憲政治ヲ露国ニ建ツルトセハ如何〕

詩歌草稿

- 〔溪面松風長〕
- 詩誌
- 〔明治三十年八月十日始めて送られて〕
- 歌稿（「筆ノ雲谷川ノ音ヨ」）
- 歌稿（「さまくの虫のなく音に」）
- 昭和十一年十一月二日朝
- 歌稿（「夕月に帰る相模の」）
- 歌稿（「我心一度に開く」）
- 歌稿（「雪ハなを木下かけに」）

（「木下尚江資料」担当）

コロンビア大学大学院にて、十重田裕一教授による講義が行われました。

Spring 2011 Topics in Japanese Literary Studies

“Modern Japanese Literature and Media: 1900s-1950s”

Professors Hirokazu Toeda and Tomi Suzuki

The Bulletin Description of the Course:

The course attempts to provide advanced graduate students with special research methods related to specific topics in Japanese literary studies. In Spring 2011, Professor Toeda Hirokazu of the Waseda University will conduct a one-month intensive seminar, dealing with the issues of modern Japanese literature and media from the 1900s to the 1950s. Professor

Tomi Suzuki will serve as a host instructor of the course.

The Spring 2011 course investigates a range of interrelated topics such as 1) changing linguistic conditions and new literary languages—including the issues of state language policies, school textbooks, and canon formation—particularly taking up the cases of the writers who became influential from the

late 1920s through the postwar periods, such as Ibuse Masuji, Kawabata Yasunari, and Yokomitsu Riichi; 2) development of publishing industries and the impacts of journalism on literary and cultural productions and consumptions—particularly examining the roles of major literary publishing houses established in the 1910s to the 1920s, such as Iwanami Shoten, Kaizōsha, and Bungei Shunjūsha; 3) new research methods in examining manuscripts—taking up the cases of the handwritten manuscripts of several authors from the 1930s; 4) the impact of censorship on literature and media during the occupation period, and the significance of examining the traces of forgotten or remembered censorship in literary texts.

Each class session will consist of a lecture on specific focal topics and issues, followed by a class discussion on the assigned

texts. The texts will include works by Ibuse Masuji, Kawabata Yasunari, Yokomitsu Riichi, among others. The instructor will introduce the new research methods regarding prewar and postwar journalism and visual media—including film, photographs, and posters—as well as writers' manuscripts and traces of textual generations.

Prerequisites: advanced fluency in modern Japanese and the instructor's permission.

Requirements:

- class participation and postings on CourseWorks (in English)
- final paper to be determined in consultation with the student's graduate advisor and Professor Suzuki. Due on May 13 (Friday).

韓国慶熙大学校外国語大学日本語科の日本研修

昨年に引き続き、2011年1月25日から28日の4日間にわたり、韓国慶熙大学校外国語大学日本語学科の学生を対象にした第2回の短期研修が実施されました。引率は同学科の松本真輔助教授、研修を担当したのは本研究所の以下の教員です。

- ・1月25日 高橋敏夫教授（現代文学の講義）
- ・1月26日 竹本幹夫教授（演劇博物館の見学）
- ・1月27日 中島国彦教授（講義と大学周辺の文学散策）
- ・1月28日 兼築信行教授（中央図書館の貴重書閲覧）

また、最終日には研修生と早稲田の学生との懇親会が開かれました。



短 信

- ・2011年3月でRAの柳本真澄が退任し、4月より新たなRAとして宮坂康一が、「メディア・書物・注釈プロジェクト」の「木下尚江資料担当」として参加いたします。
- ・2011年4月19日（火）に予定されていた、ミュンヘン大学シュルツ教授の講演会は、東日本震災の関係で中止となりました。

重点領域研究「世界と共創する新しい日本文学・日本文化研究」 News Letter 第5号

2011年6月10日発行

編集：庄司敏子・塩野加織（RA） 印刷所：三美印刷

発行所：〒162-8233 東京都新宿区戸山1-24-1 早稲田大学文学学術院内

早稲田大学国際日本文学・文化研究所（WIJLC）（所長・中島国彦）